

九州大学の波瀾です。このミニ講義は「英語圏における日本モダニズムの研究動向—文学を中心に—」と題して、1980年代から2010年代までに刊行された図書を対象として、英語圏におけるモダニズム研究の流れについて簡単に説明していきます。内容は5つに分かれています。それぞれの箇所、数冊ずつ本の概要を紹介していきます。解説にあたっては、スライドに示した4つの文献を主に参照しています。

では、まず「1. 始まりとしての横光利一」から始めます。はじめに紹介するのはデニス・キーン氏の『モダニスト横光利一』です。デニス・キーン氏は、1974年に横光利一の英語翻訳短編集を刊行しています。その後、オックスフォード大学に提出した博士論文がこの本のもとになっています。1980年に刊行された『モダニスト横光利一』は82年に日本語に翻訳されています。横光利一が1920年代にヨーロッパのモダニズムからどのような影響を受け、結果的にどのように失敗したのかという点を論じたこの本は、日本のモダニズム文学研究の先駆けとなり影響力を持ちました。また1984年に刊行され、現在は中公文庫で日本語訳を入手できるドナルドキーン氏の著書でも、西洋文学からの影響という視点から、横光利一の他に佐藤春夫、伊藤整、堀辰雄、そして川端康成の4人が論じられています。この本において、モダニズムは日本回帰に至るまでの一過程として理解されていて、2冊の著書では、モダニズムの影響が表層的であったと評価しています。新感覚派の代表格である横光利一と川端康成に関しては、その後も継続して論じられていて、1990年代では、ロイ・スターズ氏が川端康成を対象に*Sounding in Time* という本を出版しています。ロイ・スターズ氏については、その後もモダニズムに関する著書を刊行しているので、あらためて紹介します。1990年代は、日本のモダニティに関することも盛んに議論され、ハリー・ハルトゥーニアン氏の著書『近代による超克』（2000年）は、思想史という側面から、1942年における「近代の超克」論争とともに、「モダンライフ」や「日常性」の問題について論じています。この著書は上下2巻本の日本語訳が2007年に出版されています。

次に「2. 包括概念としてのモダニズム」に移ります。ここでも文学、とくに小説研究の面から4冊の本を取り上げます。2002年に出版されたセイジ・リピット氏の*Topography of Japanese Modernism*は、近代化された都市空間と、そこに生きる人間の主体性や内面との関係に注目し、芥川龍之介、横光利一、川端康成、林芙美子の4人の作家を論じています。この時期、モダニズム文学研究の中で林芙美子が注目されるようになっていきます。2006年に出版されたウィリアム・ガードナー氏の*Advertising Tower*も、やはり林芙美子に注目していますが、萩原恭次郎と並べて論じた点に特徴があり、ジェンダーや大衆文化、帝国主義との観点から、1920年代のモダニズム文学について論じています。同じ2006年に出版されたミリラム・シルバーバーグ氏の*Erotic Grotesque Nonsense*でも、モダニズム文学を大衆文化との関係から論じています。とくに浅草という空間に注目し、「エロ」「グロ」「ナンセンス」の三つの概念を、「モンタージュ」という文化的手法として提示し、各論考を展開しています。さらに2008年に出版されたウィリアム・タイラー氏の*Modanizumu*では、モダニズムを広くとらえ、多くの作品翻訳とともに論じています。例えば政治と文学の時代ともいわれる1930年代に関して、行動主義に注目した章があることも特徴の一つです。

*この内容は JSPS 科研費 JP21K00460 の助成を受けたものです。

【九州大学大学院比較社会文化研究院 波瀾 剛】

続いて3番目の「視点・ジャンル・領域の多様化」の項目に移ります。先ほど取り上げたウィリアム・タイラー氏の著書と同じ2008年に、グレゴリー・ゴレイ氏が*When Our Eyes No Longer See*という本を出版しています。この著書では、モダニズムの時代を表象の危機としてよりも、むしろ五感に関わる感覚や知覚の危機ととらえ、リアリズム、サイエンス、そしてエコロジーの視点を通して、作家たちがどのようにその危機を乗り越えようとしたのかについて論じています。その際、横光利一の他に、谷崎潤一郎、そして宮沢賢治を取り上げたことに特徴があります。次に取り上げる論文集*Pacific Rim Modernisms*は2009年に出版され、環太平洋という地理的枠組みからモダニズムの分析を行っています。そのため、韓国、中国とともに東アジアのケースとして、日本のモダニズムが議論されています。章立てが非常に多いので日本に関わる3人の章をここに挙げています。3番目の大森氏の論では、雑誌『新青年』と谷譲次を取り上げています。川端康成に関する単著を出版しているロイ・スターズ氏は、2011年に*Modernism and Japanese Culture*という本を出しています。モダニティの議論から始まることもあり、対象となる時代は明治期から現在までと広く設定されています。さらにロイ・スターズ氏が編集した*Rethinking Japanese Modernism*が2012年に出版されています。この本も非常に章が多いので、セクションのタイトルだけを挙げています。文学に関わる場所では、芥川龍之介だけでなく江戸川乱歩や梶井基次郎、椎名麟三も取り上げられています。また詩や音楽に関する章、絵画やポピュラーカルチャー、演劇に関する章など非常に幅広い領域を扱っています。このように、2000年代後半から2010年代の前半にかけて、英語圏におけるモダニズム研究は、領域や視点が非常に多様化していったことが分かります。

では引き続き、4番目の「グローバル・モダニズム研究」の項目に移ります。2010年代に入ると、モダニズム研究の体系化とともに、地理的な研究対象の拡大、および知見の共有が進んでいきます。例えば、2010年に出版された*The Oxford handbook of Modernisms*はモダニズムに関する基本的概念の整理と、世界同時的現象であったモダニズムの概要が、1000ページ以上にわたって記述されています。同書の最後、55番目の章として、日本に関する論考が収録されています。この論考ではモダン・ガールに注目して、モダニズムとコロニアル・モダニティの問題が議論されています。このハンドブックのオンライン版が刊行された2012年には、同じくOxford handbookのシリーズでグローバル・モダニズムに関する本が出版されています。こちらも大著で、10のパートからできていますが、パートIではカリビアン・モダニズム、パートIIではスペイン系アメリカ人のモダニズムなどが対象となり、まさにグローバルな次元でモダニズムが扱われています。日本に関する論考はパートVIIIに掲載されていて、ウィリアム・ガードナー氏が「シネ・テキスト」という観点から、北川冬彦と横光利一について論じています。2015年に出版された*The Modernist World*もやはり、グローバル・モダニズムについて扱っていますが、ここでは単に世界中で普遍的に存在したという点ばかりだけでなく、各地の地政学的な特性も考慮して議論が進められています。Part 1には、東アジアと南アジアを対象とする論考が8本掲載されていて、特に5番目のカレン・ソーンバー氏の論考は、中国、日本、韓国、そして台湾のモダニズム文学に関する概説となっています。また2020年には、ブルームズベリー社が、モダニズムに関する叢書の一環としてグローバル・モダニズムのアンソロジーを出版しています。ラテンアメリカに始まり、カリブ海、アフリカ、アラブ、トルコなど、各地域のモダニズムに関する主要文献を英語に翻訳

*この内容は JSPS 科研費 JP21K00460 の助成を受けたものです。

【九州大学大学院比較社会文化研究院 波瀾 剛】

しています。日本に関するパートは10番目にあり、平戸廉吉、雑誌『赤と黒』の宣言、萩原恭次郎、芥川龍之介、小林多喜二、左川ちか、小林秀雄の文章が収められています。このように2010年代に入り日本のモダニズム文学がグローバルな現象の一つとして理解されるようになってきました。

最後の5番目の項目に移ります。ここでは2010年代の後半から直近までの刊行書を取り上げて、現在の日本のモダニズムに関する研究動向を簡単に押さえていきます。大まかに4つの傾向に分けて、文学や美術といったジャンルの問題や、満州国研究、そしてモダン・ガール研究との関わりを見ていきます。最初に取り上げるのはアーサー・ミッチェル氏の *Disruption of Daily Life* です。この本は先ほども紹介した2000年代におけるモダニズム文学に関する研究業績を踏まえながら、さらに同時代の歴史的コンテクストを踏まえることによって、小説世界の実験的性格を明らかにしています。谷崎、横光、川端に加えて、平林たい子について分析している点も新しい要素だといえます。次に取り上げるチンシン・ウー氏の *Parallel Modernism* は美術家古賀春江に関する本です。この本では、文学者とも交流のあった古賀春江に関して、西洋におけるモダニズムが文化の危機を克服するために非西洋世界に注目したのと同じように、日本においても東洋とかけ離れた西洋世界に注目したという意味で、パラレル・モダニズムという概念を導入しています。美術に関しては、長年アジアの美術史について研究してきたジョン・クラーク氏が2021年に *The Asian Modern* を出版していますし、ジェニファー・ワインズフェルド氏が2002年に *Mavo* に関する著書を刊行しています。またセレナ・ストイコビッチ氏が2020年に1930年代のシュールリアリズム写真について本を出版しています。このような美術に関する関連書に触れていくことも大事だと思います。さらに満州研究をめぐる、2017年には *Ultra-Modernism* というタイトルの本が出版されています。この本は満洲の都市建築をめぐる議論をしています。英語圏における満洲国研究については、日本語翻訳が出版されているルイーザ・ヤング氏の『総動員帝国』をはじめとして、東アジアのモダンとの関係における満州国の位置付けや、日本の前衛芸術との関係についても著書が出ていますので、これらも関連図書として見ておくの良いと思います。それから最後になりますが、モダン・ガールに関しては、2021年に東アジアのモダン・ガールをテーマとして論文集が出版されています。台湾、韓国、日本、香港、上海が対象となっていて、バーバラ・サトー氏の著書 *The New Japanese Woman* や、*Modern Girl around the World*、あるいは、*Visualizing Beauty* といった論文集と共に近年の動向を押さえておくの良いと思います。

以上、駆け足で英語圏における日本モダニズムの研究動向を見てきました。30冊ほどの本を非常に短い時間で紹介しましたが、もちろんこの他にも、まだ図書と出版されていない博士論文や、ジャーナルにおける重要論文もたくさんあります。このサイトでも関連図書やリンクを貼っていますので、それらを参考にしつつ、皆さんもご自身でいろいろと調べてみてください。ではこれでミニ講義を終了します。